

「2018 年 EuroCucina エウロクチャーナ」概要

意外なようですが、今日「エウロクチャーナ」に代表される業界は「ミラノサローネ」よりもずっとしっかりと「合理性と機能性という価値と言語的純粋さ」に根付いています。部屋の調度品に関しては、特に日中を過ごす部屋の場合、ノスタルジックだったり、時代の雰囲気を出したりする要素を採り入れて遊び心を加えることもできますが、一方で、キッチン家具を製造する大企業は、信頼の置ける材質、そして、よりパフォーマンス性の高い技術(内部装置、蝶番、滑走部分などの)を導入して「完璧にサイズを測量した」落ち着いたキッチン家具を提案することを志向する傾向にあります。一般購買層はクラシックスタイルやモダンスタイルよりもカントリースタイルのキッチンを好むという想定で動いていた時期は終焉を迎えました。コンテンポラリーなスタイルが全てのラインで結果的に勝利を収めたのです。キッチン製造は「洗練された幾何学的構造」に基づいて、とても賢く、ソリッドボーイドを行きつ戻りつしています。(ベルギーのデザイナー **Vincent van Duysen** による **Dada** 社の完璧な商品 “**Ratio**” を見れば一目瞭然です)。かなり浸透したトレンドとしては「完全に中のもが見えない収納型」が好まれているということが言えます。この意味で **Giuseppe Bavuso** のアプローチは典型的です。彼は **Ernesto Meda** 社の細かい機能を満載した「究極の」キッチン “**Inside System**” を提案し、同様に **Gabriele Centazzo** は **Valcucine** 社の “**Logica Celata**” (「密かなロジック」) をデザインしました。これはなんともびっくりなモノリスのように一体感のあるキッチンです！ **Scavolini** 社の提案 “**Box Life**” (HOK とのコラボによる **Rainlight** デザイン) も同様の傾向の商品で、全ての機能を満載した、完全に「見えない収納型」のキッチンです。家電製品から洗濯機まで、跳ね上げ型の台もしくは小部屋のなスペースに全てを収納できます。結論として、今日では「部分ごとに分かれた調理台と上部棚を組み合わせる従来型のキッチンは激減している」ということが見て取れます。なぜならこのタイプは継ぎ目のない広々とした調理台・扉の価値を表現するのに適当でないと考えられているからです。石、ステンレス、コーリアン **corian**、フェニックス **fenix** などの素材からできた調理スペースと、ラミネート加工や彩色ガラスや高価な木材などがあしらわれた扉部分が美しく見えないのです。(例えば **Veneta Cucine** 製の “**Lounge**” モデルでは、鍍金加工されたモミ材が溶接されたブロンズと組み合わせられています)。つまり、壁の高さも使った「フル装備」のキッチンが、洗う、加熱する、といった作業をする「何も無い広々としたスペース」とのコントラスト的効果で調和をなし、広々としたスペースが大変機能的でしかも見た目に美しいインパクトを与えるのです(この点では **FTK (Technology For the Kitchen テクノロジー・フォー・ザ・キッチン)** の視察をお勧めします)。調理台と上部収納の従来の関係性が断ち切られた結果、極めて重要なことが起こりました。つまり「大きさのバリエーション」が広がったということです。特に、調理台が高くなる傾向にあります。これは現在の人間工学で作

業により適しているとされる高さで、さらに、奥行きも従来より深くなり、このことで細々とした調理器具の収納スペースがより多く確保できるようになっています。「色調」もまた基礎工事の建材の色調を生かす傾向にあり、ステンレスの乾いたトーンの色合いと、温かみのあるグレーからブラウンまでの色調の材質とを組み合わせるところどころにピンクやテッラノーヴァ・レッドを加えるというのが主流です。特にキッチンをモノトーンで統一する場合には白と黒を採用するというケースはまだありますが、旧式なキッチンの特徴でもあった基本色やパステルカラーというのは稀となりました。当然こうした建築上の傾向(材質的にもサイズの的にも色調的にも)と「相反するキッチン」というものもありますが、多くの場合、特別な条件、理由があってのことです。Officine Gullo 社の“Soft Grey & Nicheled Brass”シリーズがありますが、同メーカーはそもそも「高度に専門化されたキッチン」に強みを持つ会社です。その一方、Sanwa Company の l'Atelier Mendini が手がける“AM 01”のように、大都会の小さなアパート向けに考案された製品も散見されます。この製品は「まさに家具のような、家具にしか見えない」キッチンで、漆加工され、装飾を加えられた表面は曲線を描き、部屋の真ん中に配置するのにふさわしいような仕上げで、大きさはわずか 120x65cm です。この連続した継ぎ目のない表面の独壇場から敢えて距離を置いているのが「家電部門」です。ビルトイン式のものも存在しますが、特にオーブンなどのテクノロジー機器は目立つように敢えて周囲のキッチン設備とのコントラストを考えた材質や加工がされることが一般的です。よってこれらの要素は、キッチンに、車の操縦席、また宇宙船のコックピットのような価値・イメージを持たせるわけです。この意味ではエウロクチャーナの並行イベントである FTK (Technology For the Kitchen テクノロジー・フォー・ザ・キッチン) が SF 映画の中で宇宙旅行をしているかのような雰囲気醸し出しています。

2018 年 4 月 17 日ミラノ

Salone del Mobile.Milano Japan Press PR

Yuki Yamamoto - yuki@milanosalone.com - www.milanosalone.com